

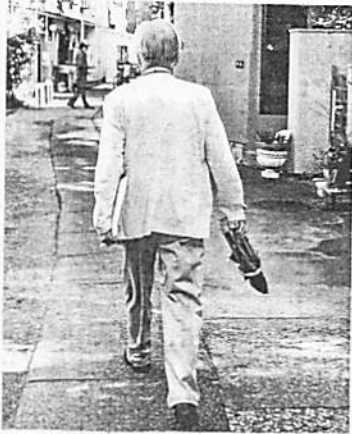
最期のときと向き合う

訪問診療医の15年 12

その日、患者宅に向かう軽の四輪駆動車の車内は、爽やかな芳香に包まれていた。運転席の横には同行する女性看護師が持参したカリンの実が一つ。「良い香りでしょう？ 僕が好きなのを彼女が覚えてくれていてね」。ハンドルを握る小堀誠一郎医師がほほ笑む。

40年にわたる外科医時代を経て、訪問診療を始めて15年。82歳の今も在宅医療の第一線で、患者と向き合う日々が続く。

「外科医の頃は患者の人生に思いをはせることなんてなかった。目の前の命を救うのには関係ないことだからね」。それが訪問診療を続ける中で変わっていった。その人らしい死を迎えるために、患者とともに考え、重ねてきた年月。二人一人の人生を聞くうちに、この仕事の奥深さに気が付



一つとして同じ死はない

た。患者に教えられ、僕という人間も変わっていったのかもしれない」

小堀医師に講演会でよく飛ぶ質問がある。「先生はどんな死を望みますか？」。答えは明快だ。「最後まで仕事を続けたいですね。訪問診療を終えて車で病院に戻り、駐車場ではったり倒れる。道路だと事故になるしね」。そう言って笑わせる。訪問診療は医師人生を完結させる最後の現場と心に決めている。

2025年には団塊世代が全員75歳以上の後期高齢者となり、日本は「多死時代」を迎える。今後、じっくり時間をかけて患者や家族に心を寄せるような在宅かどりは困難になっていき、「死のオートメーション化」が進むと小堀医師は予測する。「それは多死時代の必然かもしれない。でも、そうではない患者と医師の関係があつていい」

著書「死を生きたい人びと」にこんな一文がある。「死は『普遍的』という言葉が介入する余地のない世界である」。一つとして同じ死はない。なぜなら、一つとして同じ人生はないのだから。

車から降りると、小堀医師は患者が待つ家に向けて歩きたした。いつものように、片方の手にはカルテを、もう片方の手には、その人の傍らに身を置くための、小さな折り畳み椅子を持って。

＝おわり＝

今日も患者が待つ家へ

8月31日(月) 神戸新聞分

先日、ある退職されて久しい先生の死を耳にしました。

死期を悟ったその先生は手紙を丹意し、奥様に葬式も終わり一段落したら搬送するよう最後のお願いをしたそうです。

母がそくなる日の朝、宿直の看護師さんが夜勤明けに、もの言わぬ母の姿に声を掛けてくれたこと。私に対してお礼がまだ言えていない自分。

自分の最期は、どう考えられるのか、本当に考えさせられます。